



西川 菊 畦

## 西川 菊畦（にしかわ きっけい）

西川菊畦氏、本名豊太郎（ほかに光ともいう）は、文久元年（1861）4月、父西川耕作、母なみの長男として西里村塩之淵（現河北町西里）に生まれました。幼い時から漢学を好み、同村の逸見魯齋の塾で漢詩の指導を受けました。

明治6年（1873）には天童貫津の格知学舎に入り、本沢竹雲について経史・詩文を学びました。また、父耕作が県議会や郡長在任中は、留守を預かり父に代わって家業に励む傍ら、画を寒河江の柿本鉄堂に学び、四君子（蘭・菊・梅・竹）を得意とし、漢詩の全国的な大家大沼枕山（ちんざん）・小野湖山に学び、向井黄村の「晚翠吟社」に加盟するなどして詩作に専念しました。また、書は文徴明（明の書・画家、詩人）の書風を学んで、能筆家の誉れが高く、多くの作品を残しました。

この間、菊畦が著した漢詩集は20数冊に上りますが特に、明治39年（1906）の『梅印唱和』から、昭和10年（1935）の『鴻爪雪泥集』『菊畦餘藁』までは、毎年1冊ずつを発行し、広く諸名士と交流することを楽しみにしていました。

さらに村民の信望も厚く、明治34年（1901）41歳の時に西里村助役に就任し、西里小学校の移転改築に尽力し、その後も村会議員や学務委員を勤めました。本沢竹雲亡き後は格知学舎の2代目理事長として、同舎の維持管理と学風の存続に心を砕きました。